

# 現地実務者のコメント-討論へ向けての視点

SS4:ノルウェー、透明な世界から日本の将来、そして計画制度を考える  
(水谷誠、柳川篤志、宮川愛由、水谷香織、木藤健二郎、白水靖郎、木俣順、屋井鉄雄)

木藤 健二郎

九州大学 大学院芸術工学研究院 環境設計部門 准教授

# 総括（日本への示唆を意識して）

- 非法定と法定の計画の組み合わせ（計画体系）
  - ⇒非法定計画による制度設計が可能（財源は議会承認が必要）
  - 高速自転車道計画や都市成長協定などの仕組みを非法定（NTP）で創設
  - それらを法定計画（市町村計画など）に組み入れさせる点はユニーク！
- 各主体の立場の透明性（計画・事業主体）
  - ⇒早期の意見表明が情報公開とともに異議申し立て等を減らす考え
  - 賛否の立場すら公表されるなかでオープンに検討が続く点はユニーク！
- 手続き法と憲法による参加の根拠（手続き、PI）
  - ⇒憲法が積極的な情報公開の根拠（手続法はEU共通のレベル）
  - プランプログラム（計画手続きを始める前の事前合意形成）はユニーク！
- 計画体系における多彩な評価機会（評価制度）
  - ⇒プロジェクト概念の形成段階の評価、構想段階の評価、事業前の評価など多様
  - それらに加えて、NTPにおけるプロジェクト評価が4年ごとに実行されることはユニーク！

## ◆明瞭な計画システム-法定・非法定計画の組み合わせ

日本においてNTPのような非法定計画と法定計画（都市計画？）をつなぎ合わせるには？

## ◆立場の透明性

議論の公開性が意思決定を成功させている点から学ぶには？

## ◆明瞭な計画システム-法定・非法定計画の組み合わせ

日本においてNTPのような非法定計画と法定計画（都市計画？）をつなぎ合わせるには？

1. NTPレベルと都市計画レベルの間をつなぐようなサブプラン、広範規制計画のようなスケールの計画・議論の枠組みは日本において可能だろうか？
2. トップダウン、ボトムアップ（柳川さん）が一貫性・実行性のある政策・計画のキーとなっているという実感がある。日本ではトップで細かく決める傾向がある。ノルウェーはトップダウンで方針・ガイドラインが策定されるが、計画作業は基本的に市町村が責任を負い、裁量判断が多いという構造がある。これがトップ・ボトムの相互性を生んでいるのではないか？こうした相互性を日本ではどう担保できるだろうか？例えば委任条例のような地方自治の裁量に任せる仕組みと、トップの意思決定にボトムが参加する機会を増やす等の工夫はできないだろうか？

## ◆明瞭な計画システム-法定・非法定計画の組み合わせ

日本においてNTPのような非法定計画と法定計画（都市計画？）をつなぎ合わせるには？

3. ノルウェーでは「NTPに示される目的、プロジェクト」（水谷さん）が、実行させるための計画枠組み（柳川さん）としっかり紐づいている印象を持つ。例えばそのようなリンクを作るアイデアとして、都市環境パッケージ、都市成長協定は、国・県・市が具体的なプロジェクトについて調整・協議できる機会である。こうした仕組みの日本での展開可能性はどのようなものだろうか？
4. 同様にプランプログラム、計画審議の公開性（香織さん）、プロジェクト評価（宮川さん）などについても参考とできる部分はあるだろうか？

## ◆立場の透明性

議論の公開性が意思決定を成功させている点から学ぶには？

1. オープンな議論のほうが意思決定が成功する構図を、どうすれば日本に適用できるだろうか？
2. 意思決定の方法論を問う以前に日本では意思決定の基本動機、出発点が異なると考えられる。ノルウェーでは市民・公益のためにという基本動機がある一方、日本では開発利益の最大化、特定の産業や利害関係者の利益の最大化が重視されることが多い。したがって日本では特定の利権者の利益と、市民・公益のための利益という異なる動機をともに満たす、Win-winのための工夫の模索が特に重要ではないだろうか？どうすればそのような動機づけが可能だろうか？
3. 各組織の役割、責任分担が明確な点から学び改善できる点はないだろうか？